

## 大豆づくりの大型助っ人登場

～「ダイズ安定多収の革新技術 新しい生育のとらえ方と栽培の基本」  
有原丈二著～

今年は、“10a 当たり作業時間 10 時間以内で単収 300 キロの大豆生産”をスロ－ガンに「大豆 10・300」運動を普及組織と試験研究機関、行政が一体となって取組み、各地で数多くの大豆実証ほが設置されるとともに研修会が開催されました。その上、今年は気象条件に恵まれたことから、12 年産大豆の単収は過去最高だった平成 8 年産の 181 kg/10a を大きく上回ることが確実視されています。

しかしながら、一方では、“作業はメニューどおりやっているのに結果が伴わない”とか“手抜きをしていないのに単収がだんだん落ちてきている”といった声も聞かれています。また、地域で大豆栽培技術に精通した指導者が少ないために、基本技術の励行を進めているはずが、作業ごとの目的や作業効果が発現される条件が曖昧なことから、基本作業の励行に終わっている場合も多いのではないかと危惧もあります。

今回は、このような課題にも対応することが可能となる大豆栽培技術者必見の参考書をご紹介します。

この本は大豆の生育を窒素の吸収と代謝、発芽、土壌酸素などの視点から見直すことによって、安定多収の技術を考えようとしています。

大豆はあらゆる作物の中で窒素吸収量が最も多く、いかにそれを供給するかによって収量が支配されているという視点から、根粒の役割や無機態窒素の吸収、土壌窒素の意義などの見直しが栽培技術の改善には必要であること

発芽の良否がダイズの生育と収量に大きな影響を及ぼすこと

大豆の生育には土壌の通気性が重要であること

中耕・培土の意義の再検討、各地域の生育の違いと多収栽培技術

など、新しい知見や土壌肥料や農業気象などの観点も取り入れながら、ダイズの多収栽培技術を考えています。特に、一つ一つの栽培管理がどういった目的で行われ、いかなる条件下で効果が発現されるのかについてデータを元にした解説が加えられており、大豆の栽培に携わっている方々にとっては、その栽培技術を考えるためのきっかけを与えてくれる本ではないかと思われまます。

最近、大豆栽培に関する本が出版されておらず、指導者の皆さんも苦労されていたと思いますが、今回、農文協からタイムリーに出版されました本書は、やや難しい部類に属するかも知れませんが、大豆に関する知見とデータが満載であり、地域の大豆指導者には是非ご覧頂きたいと考えています。

蛇足ですが、先般、「大豆ニュース 29 号」で農業研究センター豆類栽培生理研究室に「大豆を作ろう」HP ができたという情報をお伝えしましたが、今回ご紹介した本の著者は、この研究室の室長でいらっしゃいます。

発行元：農林水産省畑作振興課 豆類班 tel 03-3502-8111 (内線 4318、4319)

・記事や大豆生産振興に関する御質問・御感想など、御自由にお寄せください。

・記事を転載される場合は、御一報ください。

・畑作振興課では大豆に関する情報発信手段としてホームページを開設していますので

是非ご利用下さい。なお、ホームページアドレスは <http://www.maff.go.jp/soshiki/nousan/hatashin> です。

